

今私は、以下 3 つの格言「喉元過ぎれば熱さ忘れる」「科学の探求は真実ではなく疑問である」「自然の出す命令には従わなければならない」を噛み締めている

はまゆう会会長
市丸 喜一郎

新型コロナウイルス(SARS-COV-2)のパンデミックのさなか、日本列島に居座り続けた梅雨前線は、九州をはじめ西日本各地に甚大な被害をもたらした。加えて第 2 波と思える新型コロナウイルスのパンデミックは、東京・大阪を中心に全国各地に広がり日毎の感染者数に一喜一憂している。しかしながら最近の私どもの行動には、いささか緊張感を欠いた気の緩みがあるように感じられる。

先般新型コロナウイルスのパンデミックを他人事と思っていた時の私見を述べたが、実際に自施設で感染者が発生すると事態は一変してしまう。私どもはバイオセーフティ・レベル 2 の範囲で、季節性インフルエンザや血液・体液を介しての細菌・ウイルス感染対策に努めてきたが、新型コロナウイルスによる飛沫・接触感染、ことに空気感染の対策に戸惑っている。

幸いにも無症状で経過した関係感染者 6 名(透析患者 4 名、職員 2 名)は保健行政の計らいにより、県内の感染指定施設に振り分けて診て頂くこととなり、無策の私どもにとって心強い限りであった。ここでお世話頂いた関係各施設に改めて厚くお礼申し上げます。当該感染者による濃厚接触者と認定された 60 数名は、即刻 PCR 法による検査を施行。全員陰性と判定されたものの、関係職員はその後の経過観察のため 2 週間の自宅待機、政府派遣のクラスター班のご指導もあり維持透析患者は、自院内において仮設の隔離透析を施行することにより事なきを得た。しかしながらその間、濃厚接触による観察者はもとよりその他の透析患者と透析関連従事者の心中と緊張はいかばかりであったかと推察される。

当時強制力のなかった緊急事態宣言の解除は、当市において医療機関と介護施設のクラスター発生を誘い、「当市はまさに第 2 波の真っ只中にいる」との市長の緊迫した声明が如実に物語っている。その後途切れることのない市中感染者の発生と全国各地に急速に広がる第 2 波の様相は、今もって私どもを不安に陥れているとともに健康と家計の両天秤に掛けられている。

人は、厳しい状況下に置かれた時のことを一刻も早く忘れてしまいたい衝動に駆られると言われている。対岸の火だと傍観していたことが自分の身に降り掛かり、あれよあれよという間に混乱の渦に巻き込まれた職場の記憶はいつの間にか薄れ、今や「喉元過ぎれば熱さ忘れる」の雰囲気になりかけてはいないかと心掛りである。

今私どもに出来ることは、事象の記憶が薄れない間に起きたこと、その時どうしたか、どうしてほしかったか、どうしたらよかったか、これからどうなるか、といった疑問や意見を述べ考察することこそが、今後に繋がるのではと強く感じている。起きたことを包み隠さずに述べ、事実を公明に判断することが相互の信頼感を高めると考える。科学の探求は「物事には真実はない。ただあるのは疑問である」と言われている。今回の出来事について大いに疑問を発してほしい、逆境を福に転じる好機でもある。

今年3月11日にWHOより発せられた新型コロナウイルスのパンデミック宣言から4ヶ月あまり経過した。今や世界では一千数百万人が罹患し、その内5%弱が命を落としている。貧富の差や地域・季節を問わずに世界の果てまで広がり続けている新型コロナウイルスの蔓延にとって、適切なワクチンと治療薬開発未達の今日、「無策の策」による集団免疫の獲得や閉鎖的な一国主義政策などは、グローバル化の進んだこの地球において何らの意味もなさないのではと考える。

ここで改めて、これまで感じたこと・考えたことを挙げてみる。

- ・中国武漢で発生したとされる新型コロナウイルスは自然発生であったか、そこに作為(リバーシ・ジェネティクス法によって遺伝子から人工的にウイルスは作れる)はなかったか。
- ・この20年間のウイルス感染のアウトブレイクがアジア地区、ことに中国絡みが多いのは何故か。経済優先政策と人口増加・密集による自然破壊の拡大は、新たなウイルスを掘り起こすのではないだろうか。
- ・WHOのパンデミック宣言が遅れたのは何故か。また新型コロナウイルス感染を指定感染症(第2類)に指定したいきさつは。一部の国を除いてSARS-COV(サーズ)のアウトブレイクからの学びはなかったのか。
- ・アジア人は欧米人に比べて感染(死亡)率が低いのは何故か。
- ・本邦で新型コロナウイルス発生の情報入手と対策が遅れたのは何故か。
- ・短期間の強制力のない緊急事態宣言によって一定の効果が見られたのは何故か(宿主のレセプターの違い、マスク文化、BCG接種などによるものか)。
- ・緊急事態宣言の判断基準とその作成メンバー構成はどうなっていたのだろうか。
- ・本邦の感染症分類はWHOに無条件で従っているのか、従わなかった国もあるが(ブラジル、スウェーデン、米国)、WHOには強制力があるのか。
- ・行政は何故にPCR法による検査を制限したのか。その原因は検査キット不足、検査者不足、検体採取上の問題、感染認定者の増加による医療崩壊への懸念であったのだろうか。
- ・感染情報の開示と報道に政治的配慮がされていないか。
- ・緊急事態宣言解除後、早々に専門家会議が解散になったのは何故か。(感染制御優先か、経済活動優先か)
- ・内閣の支持率が急速に下ったのは何故か。アベノマスク、Go Toトラベル、国民への一律交付金の検証はどうなっているか。
- ・本邦においては、軍事的色彩の強いといわれるCDC(疾病管理予防センター)の設置は難しいのであろうか。
- ・これから世界の経済、私どもの家計は維持できるのであろうか。透析医療の維持についても懸念される。
- ・季節性がなく空気感染で伝搬する新型コロナウイルスの流行を防ぐ手立ては、3密の回避、公衆衛生(マスク・手洗い)、不要不急の活動の忌避のみであらうか。
- ・適切なワクチン・治療薬が未達の今、集団免疫獲得の可能性はあるのだろうか。
- ・いつになったらワクチンが開発されるのであろうか。また有効な治療薬は。
- ・季節性インフルエンザ迅速キットのような検査法がいつになったら確立されるか。

次に自施設における疑問を挙げてみたい。

- ・何故に自施設で感染者が発生したのか。診療構造、業務と業務提携に問題はなかったか。
- ・緊急事態宣言後の私どもの行動は適切であったか。対岸の火と思っていなかったか。
- ・感染発生後の行動と事実関係の把握と公表は適切であったか。
- ・外来閉鎖による影響はどうであったか。その後の対応は。
- ・業務提携業者(清掃、送迎)の出務停止の実態とその後の代行業務は適切であったか。
- ・透析業務に支障はなかったか。現場の状況はどうであったか。
- ・新型コロナウイルスの検査(PCR法)はいかに施行されたか。
- ・感染防止に必要な医療資材(PPE、マスク、手袋など)、消毒薬の供給は充分であったか。その後の物資調達状況はどうであったか。
- ・休業中のリハビリ関連の患者や、自院内隔離透析患者と医療従事者の心理的動揺はどうであったか。施設公表による差別や風評被害はなかったのだろうか。
- ・第2、第3波にかけての備えはどうなっているか。季節インフルエンザの流行と重なった時の対処法は。
- ・透析医療に関しては、今後特別な配慮をして頂けない考算が高いのではないか。

懸念問題を挙げたが、最後に適切な対応だと思われた点を挙げてみる。

- ・感染発生後の公表(ホームページにて)が速やかで、適切な対応が取れていた。
- ・各部門の協力体制が良く取れていた。
- ・関係者の心中は計れないが、表面上は各自冷静な行動がとれていた。
- ・以後の感染発生は見られていない。
- ・日頃良好な保健行政と、政府派遣のクラスター班の適切な指導があった。

以上、ざっと疑問に思ったことを挙げてみたが、もっともっと具体的に疑問に思っておられる事があるのではないだろうか。「自然の出す命令には、従わなければならない」(哲学者、フランシス・ベーコン)という言葉がある。これから私どもは政治家や専門家の判断のみに頼って無策で過ごすか、知恵を絞って次に備えるか、新型コロナウイルスによる感染が全世界に行き渡る適切な予防ワクチンと効果ある治療薬の開発によって、季節性インフルエンザと同じ分類 5 になる迄頑張らなければならない。忌憚のない皆様のご意見こそが次に繋がると思っている。

参考書(前回の追加分)

- 1)高田礼人：ウイルスは悪者か。2020，亜紀書房
- 2)新型コロナ研究班：新型コロナはいつ終るか。2020，宝島社
- 3)饗堂新：飛行機に乗ってくる病原体－空港検疫官の見た感染症の現実。2001，角川書店
- 4)パオロ・ジョルダノ、飯田亮介訳：コロナの時代の僕ら。2020，早川書房
- 5)詫摩佳代：人類と病－国際政治から見る感染症と健康格差。2020，中公新書

(2020.7.23)